

お母さんの耳

宮崎大学教育学部附属小学校五年

原田 里華子 さん

私のお母さんは六年前の春に突然左耳が聞こえなくなりました。理由は突発性難聴です。突発性難聴とは、突然耳の聞こえが悪くなり、耳鳴りやめまいなどが起こる病気です。ストレスや過労、すいみん不足などが原因といわれているそうです。お母さんも突然耳鳴りとめまいがして、病院へ行ったら突発性難聴と診断されたそうです。

右耳はしっかりと聞こえているので、日常生活はできます。ただ、左側から話しかけられたり、周りがザワザワしているとうまく音が聞きとれないことが多いそうです。特に、買い物に行った時などお店の人が言ったことが聞きとれずこまっているので、そのような時は私達が相手の人が言ったことを教えています。

「大変なんだね。」

と言ったら、

「目は見えているし、両耳聞こえていないわけでもないから大丈夫だよ。お母さんよりもっと大変な人もいると思うからね。」

と言っていました。私は、お母さんは前向きですごいなと思いました。私がお母さんのようになってしまったら、このような気持ちは持てないと思います。なぜなら、かた方の耳が聞こえなくなるという事が考えられないし、もしそうなってしまったら人生がいやになりそうだからです。

お母さんは仕事もがんばっています。お母さんの職場の人も左耳のことは分かっているので、話しかけられた時に気がつかなくなったら、かたを優しくたいて教えてくれるそうです。

私がお母さんに、

「やっぱり両耳聞こえていた方がよかったですよね？」

と聞いてみました。すると、

「左側で人が話していると聞きとりにくいから、こまるよ。でも、聞きたくないようないやな話を聞かなくても良いというメリットもあるかな。」

と、笑っていました。確かに、私はお友達が近くで話していると

「何を話しているのかな？」

と気になってしまう事があるので、お母さんが言っていることはこのようなことかなと思いました。

「でもね……」

この言葉の後にお母さんが、

「耳が聞こえないのは仕方ないけど、左側から話しかけられた時に聞き直すと、『何で聞いてなかったのかな？』と不思議そうな顔をされるのが少しつらいかな。」

と言っていました。私はそれを聞いてハッとしました。見た目ではお母さんの左耳が聞こえないのは分かりません。けれど私の周りにもきくと、私に気がついていないだけでこまっている人っているのではないかと思いました。

実さいにお母さん自身も、自分の耳のことを周りの人に伝えると

「実は私も……」

と同じようにじょうの人や、知り合いに同じようにじょうの人がいるという人にたくさん会ったそうです。私はその話を聞いて、いかに自分がその立場に立たなかったら、知らないこと、知ろうとしない事が多いんだなと思いました。お母さんの耳が聞こえないということがなかったら、しょうがいや病気のことでこまったり、辛い思いをしている人のことを考えようとしなかったはずです。

今回、お母さんと耳の事を話す中で、しょうがいや病気があると、何かしらの大変なことはあるけど、だからといって特別にしなきゃいけない事はないんだと思いました。私は今までお母さんの耳のことについて知ろうとしていませんでした。

「かわいそうだね」「大変だね」

と思う前に、人にはいろいろなしょうがいや病気があるんだという事を『知る』ということが大切だと思います。

目に見えること、見えないことを分かるためには、もう少し色々な人に関心を持って気が付いたら良いなと思いました。

まずは、一番身近にいるお母さんが、生活しやすくなるように、お母さんの耳のことを知って、助けていけたらいいなと思いました。

白色の気持ちで

宮崎市立宮崎西小学校四年

岩坪

桃子

さん

「わたしは関係ない、見ていただけだから関係ない。」

三年生の時、学校の人けん集会で、六年生のげきを見ていた時のことです。この言葉で、わたしは自分の行動を思い出してしまいました。

教室で、わたしは見ていました。ぜったい、その人が悪いと分かっていたのに、やり返しがこわくて、何も言えないことがありました。

でも、なぜか、後で、後かいてしまいました。

「あの時、ちゃんと言えば、あの人はほん人にならなかったのに。」

「かわいそう。」

「もし、本当の事を言っていたら？」

「わたしはほん人にされるんじゃないか。」

「もし、し返しされたら。」

そういう気持ちで、心の中でわめいて、グニャグニャといろんな色がまざって、最後には黒になってしまふ感じです。勇気を持って言ったことがあるけれど、強い人に、

「君がほん人じゃない？ほん人じゃないならだまって。」

と、言われた事があります。

まわりからは、ささやき声も聞こえます。

「ぜったいあのだよ。」

「桃子ちゃんて、昔からいい子ぶってるよね。」

そんなことが重なり合ってしまったって、いつのまにか、見て見ぬふりの黒板みたいになってしまいました。

でも、人けん集会で、

「かわらなきゃ、ダメだな。」

と思いました。

六年生がげきの最後に、こう言いました。

「あなたは、この事をどう思いましたか？」

わたしは、それまでまよいがあったけれど、もっかく信にかわっていました。

「見て見ぬふりも、いじめと同意だ。」

ということですよ。

わたしもされたことがあるけれど、

「わたしって、何か悪いことした？」

「何で、だれも何もしてくれないんだろう。」

「味方って思っていた人は、うそだったの？」

と、思ってしまったって、どんどんつらくなります。そうすると、どうせわたしなんて、と自信がなくなると、自分をおいこんでしまいます。そんな時に、一人でもはげましてくれる人がいたから、わたしは立ち直れました。希望の光が見えてきました。

だから、もうたがいをかけられた人がいたら、味方になって、

「もう大じょう夫だよ。きつかったね。」

と、はげまします。

よりそってくれる言葉が、その人の心をかえます。

言葉は、魔法の力を持っています。使い方で、幸運を生んだり、不幸を生んだりします。それは、その人次第です。一人ぼっちになっっている人に、よりそってあげるとはいいことです。見て見ぬふりをするよりずっといいです。わたしは、そんなよりそってあげる言葉の方が好きです。

見ためて人をはんだんして、決めつけたり、おしつけたりする言葉は、もうたくわんです。

わたしは、これから白色の気持ちで、暗くなっている人の気持ちを魔法の言葉で、うすめて、

まだきれいな色にキラキラと光らせる人になりたいです。

障がいのある人を差別しない

宮崎市立学園木花台小学校六年 橋口 和矢 さん

僕の姉には障がいがあり、車いすで生活しています。姉は僕たちのようには動くことができます、何をするにも時間がかかりますが、姉はできないことがあってもあきらめず、いつもがんばっています。そんな姉は、今、県外の大学に行って自分の目標に向かって、勉強しています。僕は、姉の姿を見て「障がいなんて関係ない」と思うようになりました。

僕は、今まで姉だけではなく、姉の友人や知り合いなど障がいのあるたくさんの人と関わってきました。他にも、僕が保育園のころ、障がいのある友達がいました。これまでその人たちと関わってきて、どんな障がいのある人でもその人ができないことをサポートすれば、僕たちのように何でもできると思うようになりました。例えば、姉は高校生のころ、延岡の学校に行っていました。週末には駅員さんに電車の乗り降りを手伝ってもらって、一人で帰ってきていました。また、障がいがあって上手く座れない人でも道具を使ったり、手伝ったりして、飛行機に乗ったり、乗馬もしたりするということを知りました。姉の友達には、声が出せないけれど、カラオケが好きな人がいます。このように、障がいがあっても、周りの人が理解して、工夫すれば、僕たちと同じように生活して、色々な経験ができるのだと感じました。

障がいがあってもなくても、生活の中でうれしいことや楽しいこと、悲しいことやいやなことがあるのはみんな同じです。だから、障がいがあるからといって差別するのはいけないと思います。しかし、姉は外でじろじろと見られたり、知らない人から「歩き方が変」とか、「バカ」などと言われたことがあるそうです。障がいがあると、見た目が少しちがったり、何かをするのに時間がかかったり工夫したりしないといけないけれど、みんな同じだと思います。僕は、障がいのある人に会ったとき、何か困っていないか声をかけて、困っていたら手伝える人になりたいです。障がいのある人も、明るく前向きに暮らしていける世の中になれば良いと思います。

まわりの人に目を向けて

都城市立沖水小学校四年

川畑

壮亮

さん

「人権って何？」という質問に何も答えることができませんでした。母に教えてもらい、人権とは、人はみんな平等だということを知りました。僕の父と母は、困っている人を見かけると必ずかけよって声をかけます。

「お困りですか。お手伝いしましょうか。」

僕には、そんな勇氣もありません。それに、僕がやれることは大したことはできないし、役に立つわけではないと思っていました。しかし、今回の出来事を通して大きく変わることができました。

ある日、家族でスーパーに買い物に行った時のことです。いつものようにカートにカゴを入れていたら、僕の前に車いすのおばあちゃんが困った顔をして僕を見ていました。何段にも重なって置かれているカゴを取れずに困っていたのです。母にせ中を押しもらい、勇氣を出して声をかけてみました。

「僕がカゴを取りましょうか。」

その問いに、

「本当に助かります。ありがとうございます。」

と言って下さいました。今まで見て見ぬふりをしていたこと、どうせ僕には何もできないと思っていたことがうそのようでした。おばあちゃんに言われた一言で心が温かい気持ちになりました。だれでも自分の意しき一つで変われることができるんだと思いました。

母にすすめられて、この夏休みに障害者マークについて調べてみました。身近に目にするマークだけど、実際に経験したことがないので、自分のこととして考えたことはありませんでした。僕は、十個の障害者マークを勉強しました。今まで知らなかったことがたくさんありました。自分で覚えたことで、周りに目がいくようになりました。そして、もっとたくさんの方の人の力になりたいと思うようになりました。僕と同じ思いを持つ人がこれからどんどんふえていくといいなと思います。これからは、ボランティア活動にもさんかして、たくさんの方の学びや気づきを大切にしていきたいと思います。

世の中には、障がいやいろいろなハンデを持っている人がたくさんいます。みんなが、平等に生活できる世の中を作るために、一人一人が周りに目を向けてほしいです。意しき一つで僕は変わることができたので、みんなにも伝えたいです。そしてこれからも困っている人を見かけたらすぐお手助けをしたいと思います。

僕にできるせいはいっぱひのせい。